

# コミュニティ

community  
The New Apostolic Church around the world



2022(令和4)年第5号



(論説)

皆さんすべてに向けて……………2

(礼拝)

キリストにあって共に……………3



日本新使徒教会

# 皆さんすべてに向けて

親愛なる兄弟姉妹の皆さん。

イエス様がご自分の故郷ナザレの会堂で聖書を朗読されたお話をご存じでしょうか。朗読された箇所はイザヤ書61章1～2節でした。そこには次のように書いてあります。「主の霊が私に臨んだ。／貧しい人に福音を告げ知らせるために／主が私に油を注がれたからである。／主が私を遣わされたのは／捕らわれている人に解放を／目の見えない人に視力の回復を告げ／打ちひしがれている人を自由にし／主の恵みの年を告げるためである。」

会堂にいたすべての人の目がイエス様に注がれたので、イエス様はこの聖書の言葉がご自分について述べたものであることを告げられました（ルカ4：21）。

イエス様は、自分が来たのは貧しい人たち、捕らわれている人たち、目の見えない人たち、打ちひしがれている人たち、つまり自分を本当に必要としている人たちのためである、ということを常に強調しておられました。

「自分はそれほど貧しくないし、捕らわれてもいないし、目も見えるし、打ちひしがれてもいない。その自分に福音など必要なのか」と思っているすべての方々こそ、これは良い知らせなのです。

というのは、確かにここでイエス様は、特に貧しい人たちに向けて語っておられますが、比喩的な意味で貧しい人たちのことも語りかけておられるのです。つまり次のような人たちです。

- 恵みを必要としていることを自覚している謙虚な人たち
- 罪によって神様から離れてしまっている人たち
- 罪に捕らわれている人たち

このような人たちにイエス様は福音を宣べ伝え、このような人たちに福音を広めるために、使徒をお遣わしになったのです。



福音をすべての人に向けて宣べ伝えるのは、全ての人々が罪に苦しんでいるからです。「神様は人々を罪から解放して、ご自分との交わりを回復しようとしておられる」と語る事が神様から私たちに託されています。福音を受け入れてくれる人もいれば、受け入れてくれない人もいるでしょう。だからと言ってがっかりしないようにしましょう。これが主の御業の完成を阻むことはできないのです。

敬具

ジャン＝ルーク・シュナイダー

# キリストにあって共に



主使徒は2022年最初の礼拝を、1月2日、ドイツのギーフホルンで司式しました。



## 使徒言行録 2章 44節

「信じた者たちは皆一つになって、  
すべての物を共有にし、[…]

親愛なる兄弟姉妹の皆さん、まだいつも通りとはいかないものの、一年の初めに一緒に集まって、こうして天来のご奉仕である礼拝に与らせていただけることを、神様に感謝申し上げます。私たちが願っている通りに今年の幕開けを迎えられていないことは、私もよく承知しております。状況がもっとと違うものとなってほしかったです。未だにすべてがコロナ禍に縛られています。異常事態ですし複雑化しています。しかしだからと言って2022年に向けた私たちの計画に、いささかの<sup>あずか</sup>変化もありません。私たちは計画はいつも、私たちの主なるイエス様の再臨に備えることです。これは単なる決まり文句ではありません！「コロナ禍が私たちの計画を変えることは一切ない。」これは断言しておきたいと思います！私たちは主の再臨を待っており、そのために準備しています。悩みや日常生活やパンデミックその他のせいで、天来の生命を窒息死させるようなことは、決してあってはなりません。この点については本当に注意しなければいけません。聖なる命を殺してしまっはいけないのです！聖なる命については——理性を尽くし、さらに神様を信じることによって——私たちの役割を果たし、神様がご自分の役割を果たしてくださるこ

とを認識して、十分に責任をもって接することが大切なのは言うまでもありません。しかしこのことによってキリスト再臨の準備ができない、ということがあってはいけません。天来の生命に対する接し方が優先されて、私たちの力が奪われてしまいかねません。そういうことがあってはいけません！戦争の時代を耐えてきた私たちの先人のことを考えてみましょう！ここでそのことを大げさに取り上げようとは思いませんが、状況が違ってはいたことは確かなのです！それでも先人たちはひたすら主の再臨に向けた備えを続けていたわけのです。

外国には、非常に困難な状況に置かれている兄弟姉妹の皆さんがいらっしゃいま

す。例えば西アフリカのマリやブルキナファソに暮らす教会員の多くは、イスラム過激派によるジハード\*による脅威に絶えず晒されています。それでも彼らはひたすら主の再臨に備えているのです。ミャンマーやラテンアメリカの兄弟姉妹のことも私の思いにあります。彼らも非常に困難な状況下での生活を強いられています。ここドイツでも、病気でつらい思いをしている教会員や、切羽詰まった状況で次々と悪い知らせを受けている方々がいらっしゃいます。そういう人たちのことを考えてみてください。しかしこうした方々であっても、主の来臨に向けた備えはしていただきたいと思えます。こうした方々に当てはまることは、私たちにも当てはまります。兄弟姉妹の皆さん、これ以上深堀するつもりはありません。注意してください。こうした問題に理性と、責任感と、神様への信頼によって対処します。しかしそのせいで大切なことに集中できなくなるわけではありません。私たちにとっても優先事項は、イエス・キリストの再臨です。何があろうとキリストの再臨に備えるのです。

私たちは、主イエス様がおいでになり私たちを御許みもとに引き上げてくださるのを待っております。「私たちを」という言葉を強調したのは、主は特定の集団とか優秀な一匹狼を御許に引き上げるわけではないからです。主がおいでになるのは、一つの会衆を御許に引き上げるためです。それは、聖霊の働きによって、キリストにあつて一つとなることができた信徒たちの会衆です。つまり花嫁の会衆です。主イエス様はこの花嫁を御許に引き上げるためにおいでになるのです。ですから今年は「キリストにあつて共に」という標語を掲げたのです。

私たちは神様と永遠に交わりを持ちたいと思っています。さて、花嫁になれるのはどのような人でしょうか。それは、全面的に聖なる生き方をして、神様の御旨に耳を傾ける人々です。このような人々はもう今から、神様と交わりを持つために努力しています。この人々は、キリストが再びおいでになった時、神様との永遠の交わりに導かれることとなります。全面的に聖なる生き方をしようと決意していますから、もうここにちから神様と交わりたいと思うのです。私はこれまで何

度も「聖なる生き方とは、すなわち交わりにある生き方である」ということを強調してきました。三位一体の神様は御父なる神、御子なる神、御霊なる神の交わり

による神様です。これはどこかの神学者が思いついた素晴らしい学説などではありません。これは大変なことなのです！御父なる神、御子なる神、御霊なる神は三者別々の位格ですが、絶えず交わり、永遠に一つです！神様は人類を、ご自分のかたちに造られました。「個として人をお造りになったのではなく、男と女とにお造りになり、互いに交わりを持ちながら暮らすものとされた」とも言えます。両者は本質も性質も同じで、互いを必要としており、神様と交わり、お互いに交わりをもって暮らしていました。この状態が続いていた間、人類は神様の御旨にかなっていません。神様との交わり、お互いの交わりを享受していません。この状態が急変したのは、人が罪を犯した時でした。しかしそれは神様の御旨でした。

御子なる神様はご自分の花嫁に対して、どのように考えておられるのでしょうか。「父よ、私があなたと一つであるように、彼らをつつとしてください！」聖なる生き方というものが、交わり・共同体における生き方であることの証明です。全面的にこの聖なる生き方をして、神様と一つになるよう努力しましょう。それだけでなく、お互いに交わりをもって一つ努力もしましょう。そして、私たち信徒間の一致を、ますます強く、ますますはっきりとさせるよう努力しましょう。

「キリストにあつて共に」とは、「初期のキリスト者たちのように、定期的に一緒に集まって、一緒に礼拝に参加しなければならない」ということでもあります。使徒言行録の記述によれば、初期のキリスト教徒も聖霊の賜物を受けた後で共にいることの必要性を感じていました。彼らはいつも共におり、すべてのものを共有していました。定期的に神殿に通い、ユ

<訳者注>

ジハード…本来はイスラム教で「宗教のために努力する、戦う」ことを意味するが、近年、政治的動機による戦争やテロリズムを正当化する標語として用いられることがある。(ウィキペディアより)

ダヤ教の礼拝を聞いてから、キリスト者として一緒に聖餐を行うために、キリスト教徒の自宅に集まったのです。少なくともエルサレムの会衆ではこうしたことが行われていました。ただほかの会衆ではあまりこうしたことは行われていませんでした。エルサレムの会衆は「すべてのことをみんなでやろう。すべての物を分け合おう。全ての人にとって物が不足しないようにしよう」と決めました。こんにちとは違います。今は一人ひとりが自家用車を持ったり、財産を持ったりします。しかしこの分かち合うというのは、この世の資産のことではないのです。ここで言っているのは、霊的な資産のことなのです。しかし私たちは同じものを共通して持っています。私たちの主は同じお方です。私たちの未来も「キリストがすべて」という点で同じです！そしてこうしたものを共有していることが、私たちにとってとても大切だからこそ、一緒に集まって、礼拝の中で、神様との交わりや互いに交わりを持つことの必要性を感じるのです。

このことについてパウロは「同じ御霊をいただいている私たちは、同じ思いを抱き、口をそろえ、声をそろえて、神様を称える必要性を感じる」と言っています。というのは、信じるようになった人、聖霊の賜物をいただいている人——聖霊に満たされている会衆——は、思いを一つにして、調和を保ちながら一つのところに集まり、口をそろえて神様を褒め、その栄光を称えるからです。つまり、聖霊の賜物をいただいている人々は、多くのものを皆で共有しているため、互いに一緒に神様の御奉仕を体験し、神様を褒め、その栄光を称える必要性を感じるのです。主イエスが私たちと一緒にお召しになるのは、私たちと一緒に祈りを献げようとしてくださるからです。「一緒に」です！イエス様は私たちと食事を共にしてください。弟子たちに「あなたがたはすべて、私のもとに来なさい」と言われたように、私たち皆を強めてくださいます。私たちのお世話をしてください。私たちが共にいるならば、その真ん中に立ってくださいなのです。

これから申し上げることは、個人的見解です。礼拝への出席には、社会的要素もあります。誤解しないでください。政治表明をしようというわけではありません。ごく一般的なことです。ある人たちが自分の意見を知ってほしいと思うなら、知ってもらうことがそれほど大事なら、「一人で活動してもしょうがない」ということが分かるでしょう。自分たちの意

見、自分たちが求めていることを人々に確実に知らせるには、どうすればよいでしょうか。皆で一緒になって、署名を集めたり、通りに出てデモ行進したりします。そうするほうが訴える力が大きくなることを知っているからです。皆でそうすれば、私たち全員が嘆願書に署名すれば、皆が同じ手紙を送れば、皆が集まってデモ行進すれば、一般の人々は気づいてくれます。一緒になるほうが訴える力が強くなることを知っ

ているのです。この世が悪に支配されてはならないということにキリスト者として同意していることを、公に言い広めましょう。「我々は悪しき者の支配に敵対し、イエス・キリストの支配を受ける」ということを、私

たち一人ひとりが個人として言い広めるのは結構なことですが、キリスト者が礼拝に参加しなければ、その効果はあまり見込めないでしょう。そのような意味で、私たちが礼拝に参加することには、社会的要素があるのです。キリスト者は「現象に左右されず、悪に敵対し、イエス・キリストに従い、天来のご奉仕において交わりを体験すること」を公言しているからです。

しかし、礼拝に参加することにはもっと大きな意味があるのです。礼拝ではめいめいが席に着きます。まあ、会釈くらいするでしょう。二言三言会話もするでしょう。しかしそれがそう大事なことはありません。もっと大事なことがあるのです！それは、互いに交わりのうちに生きていけるようになるなければいけない、ということです。これが進むべき更なる一歩です。会衆で一致を図るためには、交わりのうちに生きていかねばなりません。交わりのうちに生きるとは、分裂要因を克服できるようにしなければならない、ということです。分裂要因はたくさんありますし、それ自体はまったく問題ありません。私たちは皆違います。皆、自分なりの意見があります。自分なりの考え方があります。自分なりの流儀や物事の進め方もあります。分裂要因があることは正常なのです。その分裂要因を扱えるようになれば良いのです。「個性を捨てる。すべて型通りに合わせろ」ということではありません。大事なのはそこではありません。隣人の異質性を受け入れて、それに対処できるようになることが必要なのです。

最近の人が使い続けているコミュニケーション手段がおかしいことに気づかざるを得ません。お互いのコミュニケーションを図るのに、これほどたくさんの可能性が出てきたことは

## 礼拝に出席することには 社会的要素もある



これまでありません。彼らは何をするのでしょうか。私たちにとって、あることに気づかされるのがますます多くなってきました。彼らは自分と同じように考えたり行動したりする人たちとしか付き合いません。集団があって、その集団の中だけで話すのです。別の集団では、その集団の中で話をするのです。そしてそれぞれの集団には、考えや行動が同じ人たちだけが集まるのです。ただ重要なのはそこではありません。私たちは隣人の異質性を受け入れられるようになり、その異質性と共に生きられるようになるべきなのです。平和のため、何事もうまくいってほしいという思いからだけではありません。もっと重要なことがあるのです。私たちの共有しているもののほうが、私たちを分裂させるものよりも大切であることを学んで、そのことを証明しなければならないのです。これこそまさに重要なのです。

私たちには共通に持っているものが数多くあります。同じことが召されています。同じことを信じています。同じ主がいらっしゃいます。同じ未来があります。キリストが私たちのすべてです。これらすべては、私たち個人の考えよりはるかに大切です。そしてここに大きな問題がある、と私は考えています。つまり私たち個人の考えや人間性があまりに表<sup>おもて</sup>に出過ぎて、それが兄弟姉妹で共有している、キリストや信仰や私たちの未来よりも、私たちにとって重要視されかねないのです！愛する兄弟姉妹の皆さん、それでは意味がありません！私たちにとっての分裂要因を克服し、キリストが一番で重要であること——そしてこれが私たち共通に持っているものであること——をはっきりさせましょう。

交わりのうちに生きるとは、分かち合おうとすることでもあります。このことはすでにバプテスマのヨハネの時から始まっています。彼がこのことを訴えた時はうまくいきませんでした。したが、それでも彼は、当時のユダヤ人に対して毅然とした

姿勢で「下着を二枚持っている者は、持たない者に分けてやれ」と訴えました。下着を分け合うことは当時から普及しませんでしたし、こんにちであればなおさらでしょう。ここでもそうですが、これは財産とか家とか車の問題ではありません。私たちの心の問題です。聖霊は、当時からすでに、バプテスマのヨハネを通して人々にあることを自覚させようとしておられました。それは「隣人に気を配りなさい。隣人が必要としていることに気づき、それに対応しなさい」ということでした。だからこそ、分かち合うのです！自分のことばかり考えず、自己中心、わがままを克服しましょう。隣人が必要としていることを知り、隣人の助けになることをしましょう。ここに、キリスト者であることの意味があるのです！すると、もっと深く考察しなければならない、ということになります。次世代の人々のことを考えなければいけないのです。私たちの社会において、これは大きな課題でもあります。

必要なこと、願っていることは、世代によって様々です——そしてそれぞれの世代が自分勝手に自分たちが必要としているものを獲得するために血眼になっています。しかし、自分自身の世代を振り返り、他の世代の人々——つまり自分の前後の世代——も必要としているものがあることを認識しましょう。自分自身の国を越えたところに目をやり、あらゆる側面で隣人が必要としているものがあることを認識しましょう。そしてそのことについて、何かしましょう！

交わりのうちに生きる…。これをパウロはわかりやすく表現しました。キリストの体にたとえたのです。交わりにある生き方を、キリストの体という見事なたとえで表現したのです。「目が手に向かって『お前は要らない』とか、頭が足に向かって『お前たちは要らない』とは言えない」と、分かりやすく述べています。交わりにおいて生きることは、神様がお命じになったことですが、それは成し遂げるべき奉仕が兄弟姉妹にあり、しかもそれが彼らだけでできないことを、神様は十分ご存じだったからです。キリストの教会が自らの務めを成し遂げようとするなら、教会全体でそれをしなければいけません。イエス様から期待されている奉仕を、一人ですることはできません。個人がするのは奉仕の一部分です。奉仕は私たちが一緒になって、教会として、キリストの教会として、はじめて成し遂げられるものです。私たちにはキリストの体が必要なのです。このことは特に、教役者と会衆との関係に言えることです。「教役者は教役者、会衆は会衆」というものではありません。「会衆は教役者がいなければ何もできないが、教役者は会衆がいなくても自分自身の救いを配慮できる」というものではありません。両者互いに必要なのです。そうで



なければ意味がありません。お互いに助け合い、祈り合うのです。聖書では、これが非常に見事に表現されています。種々人々と刈り取る人の話です。つまり任務や責任は様々でも、うれしい時は皆がうれしいのです。愛する兄弟姉妹の皆さん、会衆に属す一人ひとりに、役割や務めや責任があります。ある人にはこの務め、またある人には別の務めがあります。務めはそれぞれ様々です。しかし、自分の持ち場において務めを成し遂げた暁には、皆で喜びます。キリストにあって喜ぶのです。

愛する兄弟姉妹の皆さん、交わりにおいて生きるとは、相手に与えようとするだけでなく、相手からもらうこともでもあります。これはとても大切です。ここである人は「いやあ、もらうことなんて簡単だよ」と言うでしょう。ところが思いのほか簡単ではありません。私が見るところ、相手から何もほしくないと思っている人がますます増えています。こういう人は独立独歩を好みます。束縛されたくありません。自給自足を求めます。つまり、人に依存したくないから何一つ受け入れようとしません。こういうことを求めないのです。人から何かをもらうくらいなら、少ないもので済ませたいのです。これは現代社会で生じたことの一つです。人から何かをもらおうとしないのは、その人に借りを作りたくないからです。自分のことは自分でやりたいのです。これは、キリストの体というたとえに真っ向から反するものであり、神様の御旨にも反します。私たちが人にもものを与えることは、神様の御旨の一つですが、人からもものをもらい受けることも、神様の御旨なのです。これができる謙虚さを私たちに持ってほしい、と神様は願っておられます。「人がいなければ自分だけではどうにもならない」という思いを持ってほしい、と神様は願っておられます。これも交わりの中で生きることなのです。



2022年は「交わりの中で生きていこう」ということも考えながら取り組んでいきましょう！私たちにとって分裂要因となるものを克服しましょう。私たちにとって最も大切なのは、お一人の主、一つの目標、お一人の御霊、一つの召命です。

そうしないと、感じ方も考え方も意見も、確実にばらばらになるでしょう。相変わらず「私はフランス人。あなたがたはドイツ人。それでいいじゃないか」という状況のままでしょう。私たちが共通に持っているもの——これが一番大切なことです。「共有するものを増やすにはどうすればよいか」「もっと徹底して共有できるようになるためにはどうすればよいか」を考えましょう。隣人が何を必要としているかをあらゆる側面から把握し、その必要を満足させられるように支援しましょう。私たちに期待されている奉仕を、一緒に実現させましょう。互いに寄り添い、時には人から提供されるものをいただきましょう——自分の力だけで絶対にできないことは分かっているのですから。

この交わりに関する四つ目最後の側面は、存命者と故人との交わりです。これも非常に素晴らしいことです。私たちは別々の世界に生きているわけではないのです。目に見えるものと見えないもの、存命者と故人で構成される、たった一つの会衆、たった一つの教会です。先ほど申し上げたことに戻りたいと思います。私たちの前の世代が種を蒔き、こんにちの私たちが刈り取るのです！私たちが収穫できるのは、前の世代の人々の働き、犠牲、構築してきたもののおかげですが、私たちは皆で喜びます。陰府にいる魂も喜ぶのです。私たちにしてお一人の御霊がいらっしゃいます。つまり聖霊です。そしてただ一つのパンがあります。つまり聖餐です。この世にも陰府にも聖霊がおられ、聖餐があります。そして私たちに一つの未来があります。一つのことを信じています。陰府に

いる大切な人を思う時、以前の姿を思い起こしますが、もうその姿ではありません。彼らは何らかの方法で、毎回の礼拝に臨席しているのです。そして聖霊の働きによる効果を皆が感じます。立ち止まったままではありません。私たちと一緒に移動しているのです。五十年前あるいはほんの十年前の考えで止まってはいないのです。聖霊が彼らを助けてくださいます。交わりにおいて準備し成長しようとしている状況は、この世と同様に陰府においても全く同様です。このことを私たちは折に触れて思い起こす必要があります。こんにちの私たちを見て、驚いて「ああ、どうなっているんだろう」とは言いません。同じように聖霊の教えに与っていますし、きっと私たちと歩んでいることでしょう——私はそう強く確信しています。彼らも同じ神様の御言葉をいただいているからです。そして思いも私たちと同じです—と申しますか、私たちが同じ聖霊に従っているのであれば、彼らと思いが一つであるべきです。お一人の御霊がおられ、一つの未来があり、喜びを一つにしているのです。

このことを何度も確信できるのは、素晴らしいことではない

でしょうか。この世と陰府は別々の世界ではないのです。目に見える世界と見えない世界があるのは確かですが、陰府にいる私たちの大切な人は、私たちと一緒にいます。同じ神様のご奉仕を体験します。同じ道を歩みます。同じ目標があります。主は、再びおいでになる時、私たち全てを、存命者も故人も、御許に引き上げてくださいます—そしてこの時私たちは本当に一つの心と一つの魂になるのです。自分自身の霊、自分自身の魂であっても、新しい体、復活の体を身に着けることとなります。魂が天使のように浮遊しているわけではないのです。新しい体を身にまとい「この人はあなた」「その人が私」と認識することができるのです！人格はそのままです。個性もそのままです。良くないものだけが無くなっていきます。そして皆がキリストにあって完全な者となり、主と永遠に交わることになるのです。愛する兄弟姉妹の皆さん、これが私たちの未来です！どうか、私たちの身の回りで起こっていることに、気を散らさないようにしていただきたいのです。当然かなり深刻なことではありますが、主がまもなくおいでになることを忘れてしまうほどではないのです！アーメン。



写真左：ヘルゲ・ムチェラー教区使徒補佐

写真右：ラルフ・フィカリースマン使徒



## まとめ

- 交わりにおいて生きることは、キリストの再臨に向けた霊的準備の一部です。
- それぞれの違いを克服し、互い尊重し合い、共にキリストに奉仕できるようにしましょう。

### コミュニティ

2022(令和4)年第5号・日本新使徒教会発行

日本小教区主任牧司：門平 彰弘 (E-mail: kadohira.nac@icloud.com)

多摩教会 〒206-0014 東京都多摩市乞田 1320

Tel. 042-374-0070 (日本小教区本部)

松山教会 〒799-2468 愛媛県松山市小川甲 110 番地 17

Tel. & Fax. 089-994-3556

新使徒教会国際本部：https://www.nak.org/

新使徒教会西太平洋教区：https://www.nacwesternpacific.org/

新使徒教会日本小教区：http://www.nac-japan.org/

監修：高島 健郎 / 編集担当：松岡 利恭